



Title	ヒンディー文学者たちの言説にみる近代化の模索
Author(s)	小松, 久恵
Citation	アジア太平洋論叢. 2007, 17, p. 149-164
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100059
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヒンディー文学者たちの言説にみる近代化の模索

小 松 久 恵*

1. はじめに

19世紀半ばから20世紀初頭にかけて、インドでは植民地化が進行し植民地体制が確立していった。この時期は民族意識が芽生え、昂揚して、様々な社会改革運動に発展したいわば転換の契機となった時期であったともいえる¹。

この変動の時期、ヒンディー文学界においても新しい大きな流れが生まれた。19世紀半ばから始まったバーラテンドゥ時代には、バーラテンドゥ・ハリシュチャンドラ (Bharatendu Harishchandra) 主導のもとでヒンディー語散文体が提唱され、その一世代後のドゥヴィヴェデー時代 (Mahavir Prasad Dvivedi 主導) にはそれが整理され、ヒンディー文学界全体の発展につながった。当時を代表するヒンディー文学者たち——バーラテンドゥ・ハリシュチャンドラ (1850-1885)、プラタープ・ナーラーヤン・ミシュラ (Pratap Narayan Mishra 1856-1894)、バル・ムクンダ・グプタ (Bal Mukund Gupta 1865-1907)、バドリーナーラーヤン・チョウドリー ‘プレームガン’ (Badrinarayan Choudhry ‘Premghan’ 1855-1923)、バル・クリシュナ・バット (Bal Krishna Batt 1894-1914)、マハーヴィール・ブラサード・ドゥヴィヴェデー (Mahavir Prasad Dvivedi 1864-1938)、シヴァ・プージャン・サハーイ (Shiv Pujan Sahay 1893-1963) ——らはみな、複数の新聞や雑誌に編集、寄稿という形で関与しており、ジャーナリズムは彼らの活動の主たる舞台であった (Dalmia 2004: 407, Orsini 2002: 52-68)²。

* 大阪外国語大学非常勤講師

彼らはジャーナリズムを通じて社会の啓蒙を目指し、それは国の独立への願いへと発展した。文学者たちは社会の発展・向上に向けて、どのような理想を抱いていたのか。社会の発展、近代化を語るとき、彼らが念頭においたのはどのような社会だったのか。これまで、近代ヒンディー文学の創設者と評価されるパーラテンドウ・ハリシュチャンドラをめぐるのは、その作品の翻訳紹介や文学活動の紹介（古賀 1993、高橋 1990）、さらに時代背景とともに詳細な人物像の研究、並びに彼の女性問題に対する意見に焦点を当てた研究（Dalmia 1997, 2004）などがなされてきた。しかしハリシュチャンドラ以外の、上述した近代を代表する他の文学者たちには、ほとんど注目されてこなかったといえる³。小論ではハリシュチャンドラのみならず、彼と同時代、ならびにその一世代後の代表的なヒンディー文学者たちにも同様に注目する。そのことによって、当時の近代北インドの知識人たちが作り上げた言説の傾向を分析し、彼らの主張に近代化への意識、ならびに民族意識の形成過程をみることを小論の目標とする。

2. 西洋近代との接触とその影響

1857年に始まったインド大反乱は、インド人による英国への初めての大規模な抵抗であった。しかし英国の圧倒的な組織力の前に、統一を欠いた反乱軍は徐々に敗退し、1859年までには反乱の勢いも自然に消滅していった。反乱の結果、インドにおける東インド会社は終焉し、1858年のヴィクトリヤ女王の宣言をもってイギリス国王による直接統治が始まった。直接統治が始まるにつれ、インドにおける西欧文明の影響も次第に増していった。

この時代の特徴は、英語教育を基礎として成長した都市中間層の出現である。イギリス権力のお膝元である大都市、特にイギリス支配の拠点であったカルカタ、ボンベイ、マドラス、ベンガルを中心に英語教育のためのカレッジが設立され、そこで教育を受けた人々がインドの新しい文化や社会の発展を担う中間層として台頭した。しかしその一方で、イギリス権力の影響が及びにくい地方や農村部との間には大きな差が生じていた（サルカール1993: 95）⁴。新しい動きの最大の中心地であったベンガルは、東インド会社の本拠地であり、多くの行政機関が

存在していたため英国との接触機会がもっとも多く、そのことが早くから人々の覚醒を促した。そのベンガルと比較した時、北インドの覚醒はかなり遅かった。その理由として英国との接触機会の少なさと、地理的な要因が挙げられよう。北インドは内陸にあり、村落共同体がその大部分を占めていた。また村落の内部や一地方全体に強力なカースト、氏族、部族による権力網が張り巡らされており、古い社会組織が力を持っていた。そしてそのことは外に対する排他性を意味した。ヒンディー文学者たちは、北インドのこの後進性に自覚的であった。中でもドゥヴィヴェーディーは、連合州を表す際に常に「哀れな」「不運な」という形容詞を用いた。そして進歩的な他州と比較することで、北インドの後進性にしばしば言及している⁵。

西洋近代教育の影響により、インド古来の伝統と価値観に対する人々の自覚が呼び起こされた。つまり西洋文化への接触によってもたらされた衝撃が、伝統的諸価値を覚醒し、自覚的なものへと高めたのである。この伝統への自覚と西洋の影響がぶつかり合い、新しい思想潮流が生み出され、それが民族運動へと発展することになった。北西部に遅れを取っていた北インドにおいても19世紀後半から、新しい思想潮流に接触した文学者たちの啓蒙活動が始まった。

3. 対英国言説の変遷

(1) 19世紀中葉まで：歓迎すべき救世主

19世紀中葉までインド国内の英国支配に対する感情は、批判に徹したものではなかった。宗教的、社会的改革者の第一人者であったラームモーハン・ローイは、英国の統治を非難すべきものとしてではなく、ムスリムの悪政を崩壊させた解放者として評価し、歓迎した⁶。ローイのような立場は20世紀に入るまで、ヒンディー文学の世界においてもごく普通に見られた。作品の多くを憂国の情に動かされて執筆したとされるバーラテンドゥは、1877年に「インドの発展はどうすれば可能か」との題目で演説を行った。そこで彼が発展の妨げとしたのは、王侯とバラモンの怠惰、誤った信仰、外国製品や言語への依存などであり、そこにイギリスの支配が挙げられることはない（古賀 1993: 59-64）。逆にイギリス支配下にある

ことを「ありとあらゆる機会に恵まれ」「かほど発展の都合に恵まれ」と述べて称賛している。イギリス支配に対するこの態度は、彼の戯曲にも明らかである。

彼の代表作 *Bharat Durdasha* (インドの惨状 1880) には、惨めな状態にあるインドとその原因となるものが擬人化されて登場する。インドの衰退を象徴する *Bharat Durdaiva* (インドの不運) は、半分イスラム教徒、半分キリスト教徒の衣装を纏って現れる。その「不運」がインドを崩壊させるために派遣する兵隊たちが、インド崩壊の要因の「悪」として描かれるが、その「悪」として、因習や宗派争いを生み出す「宗教」、勢力争いを繰り返す藩王たちの内紛、富への拘泥が招く強欲や利己心、汚職、病、飲酒、怠惰、無知迷妄などが列挙される。しかしそこに英国統治が含まれることはない (Das (ed.) c1950: 471, 490)。この戯曲において、バーラテンドゥは女王への忠誠の念を表明していることが明らかであり、彼もまたローイと同じようにイギリス支配を批判することはなかった。

(2) 20世紀初頭まで：パターンリズムの期待と請願

B.M. グプタの *Shivshambh ke citthe aur khat* (シヴァシャンブからの手紙 1904-05) は、人種主義者、ならびに帝国主義者として名高いカーゾン総督にあてた8通の手紙という形式をとった記事であり、1904年から5年にかけて『*Bharata Mitra*』紙に掲載されて国中の話題となった。グプタはその「手紙」の中で、カーゾン総督の様々な業績を批判する。飢餓の中で行われた豪華な戴冠式典やヴィクトリア記念館の設立、何度も繰り返すパレード、「ブタ小屋」のような周囲を無視した総督官邸周辺の整備、そしてベンガル分割。グプタはそれらのカーゾンの行動を、総督としての「duty」を果たすことではなく「show」に夢中であるためだとした (Sharma (ed.) c1950: 1)。けれど、手紙に現れたカーゾンに対する彼の批判は峻烈なものには程遠く、むしろ「請願」というにふさわしいものであった。グプタは、ヴィクトリア女王は我々にとっても母親である、とインド人もまた国民であることを強調し、本国と同じような厚遇を求める。そして臣民とともに祭りを祝った神話の世界の王を理想とし、下々にも情けをかけてくれるよう統治者の善政を求めた。そこには国民主権という観念はない。彼は記事を麻薬患者の戯言とし、「わたくしめはまた麻薬を楽しむことに戻りましょう」と締めくくっている。

まともに取り上げてはもらえないだろうというあきらめと、それでも主張せずにはいられないという葛藤がにじみ出る言葉である。同時代の他の文学者たちも、パーラテンドゥやグプタ同様、英国政府に対して強硬な立場をとらなかった。ブレームガンにしても、英国に国（インド）の全員を幸福にし向上させることを期待し、その期待が裏切られると、英国をあてにしてはならない、とあきらめの姿勢をみせるのみであった（Prasad (ed.) c1950: 211）。

(3) 20世紀初頭から：批判すべき搾取者

20世紀に入ると、文学者たちの英国に対する姿勢に徐々に変化が見られるようになる。バットは英国とインドの関係を「オオカミとひつじ」「泥棒と被害者」とし、その統治を強く批判するようになる。そして、インドは英国からの小額の援助に喜んでいる英国政府に飼われた「ペット」である、と自国の依存心を批判した。またドゥヴィヴェーディーは英国のおかげでサティー、女兒殺し、女性の奴隷制がなくなった、と因習撤廃への助力を感謝しながらも、政府が教育に予算を割かないことを批判した。「国民詩人」マイティリーシャラン・グプタ（Maithili Shalan Gupta）は、その代表作である *Bharat Bharati*（インドの声 1912）において、飢餓を招く英国の搾取を強く批判している。善政を求めて請願することが精一杯であった時代を経て、文学者たちは次第に英国政府に批判の目をむけるようになっていったのである。

4. インド社会に向けた視線

(1) 19世紀末まで：社会の衰退要因としての宗教批判

植民地制度が確立していく当初、イギリス支配を甘受しそれを賞賛していた一方で、文学者たちは自国社会に厳しい視線を向けていた。彼らがまずインドの進歩を妨げる要素として挙げたのは自国の文化、特に宗教であった。

パーラテンドゥはインドを「怠惰この上なき国」とし、国の進歩を導くべき王侯とバラモンがあらゆる怠惰に取り付かれていると批判する。そして国の進歩のための百般にわたる改善を実行するのは、「鉢巻きをしめ、怠惰な気分を捨て去」っ

た我々自身であることを主張した。彼は信仰生活と社会生活とを渾然一体となしていた祖先を賞賛すると同時に、祭礼や齋戒などの形式を本質とみなす、現在の信仰形態を批判した（古賀 1993: 59, 61-63）。この意見との類似を、プリームガンの主張にも見ることができる。彼は聖地のバラモンたちが巡礼者たちから毎年数10万ルピーをせしめ、聖者の衣装を纏いながら実際は悪習や悪行に没頭していることを批判し、そのような「聖者」を寛容する信仰の是非を問うた。彼はまた、無数の宗派が存在してそれぞれが互いに争いあっていることを批判し、「ジャーティ、家、個人の間に不和と敵意が充満している」と宗派争いが民衆の思想に与える悪影響を指摘すると同時に、宗教が果たすべき役割を追求した（Prasad (ed.) c1950: 222-223, 214）。

バットは宗教のもたらす弊害について、また別の点を指摘している。彼は「民族の特長」（1887年）と題する記事において、どの民族にも必ず優れた点があると主張する。そしてインドのそれを「哲学的、思想的」とできるとし、ゆえにインドでは宗教が盛んになったと誇るが、その一方でその特長ゆえに現実よりも来世を重視し、それが社会と国の発展への無関心を生んでいるとも記す（Singh (ed.) 1996a: 46, 49）。彼は宗教によって正当化される「来世での幸福」という概念が現実を直視することを妨げ、現実逃避ともなりかねないことを問題とした。

（2）20世紀初頭まで：「優れた民族」の強調

20世紀に入ると、ジャーナリストたちの姿勢は変化する。彼らは自国の文化を内省する代わりに、過去の栄光を強調し、インド人が民族として何ら劣っていないことを主張し始めた。

M.P. ドゥヴィヴェーディーは1909年3月に発表した「インドこそが西欧の師」と題する記事において、その題目通りインドの文明が過去西欧を凌駕していたことを主張する。彼はインドの偉大な文明を西欧の学者たちが認め始めたことを紹介し、古代インドは偉大な文明国であり、西欧諸国に様々な知識、技術、そしていくつもの品物を普及させたことを誇る（Dvivedi 1988b: 107）。彼は「師」としての立場を失った現在を嘆く以上に、文明を誇った自国の過去の栄光を広く知らしめることに重点を置き、インド人は劣った民族ではないことを主張した。

また B.M. グプタは、過去ばかりでなく現在のインド人も能力的に何ら劣ってはいないことを主張した。彼はカーゾン総督にあてた手紙（1904年）において、「あなたのように教養豊かでご立派な方が、インド人には多くのことを成し遂げる能力がないと何故にお思いなのですか」とカーゾンがインド人の能力を過小評価していることに反駁する（Sharma (ed.) c1950: 295）。そして本当に能力がないのかどうか試してみればよいとしながら、「知性、教養、労働、弁論、忍耐力などどの点においてもインド人が他の民族に劣るものはない」と主張した。

彼らの狙いは、自国の民にインド人としての誇りを抱かせ、自分たちが支配されるにふさわしい劣った民族ではないことを知覚させることにあった。20世紀初頭のジャーナリズムにはインド人の国民性を肯定し、その誇りをもって民族意識を昂揚させようとする動きを見ることができる。

(3) 1920年代から：より厳しい内省へ

1920年代に入ると、文学者たちの視点は再び自国文化への内省に変化する。S.P. サハーイは自らが編集する週刊誌『Matvala』の記事（1924. 11. 23号）にて墮落した自国社会を率直に批判している。彼の自国に向ける視線は、バーラテンドゥら19世紀末のジャーナリストのそれより厳しいものであった。サハーイはインドを「売国奴、臆病者、偽善者、おべっか使いが幅をきかせるような国」「肉親同志が争い、か弱き女性に対して様々な社会非道が横行し、自己の利益や宗教のみに目がくらんで他が見えなくなり、隷属が教育によって正当化され、自尊心のかげら夜会もない国」と糾弾し、そのような国では「正義を行うものも正しく評価されない」、「英国人の非道も甘受するしかない」と主張する（Singh (ed.) 1994: 76-79）。19世紀末のバーラテンドゥらの主張は、国の発展のためにインド人自身が努力せねばならない、という呼び掛けであった。怠惰をむさぼり、指導者を待つだけでは発展は為されないことを説き、行動を起こすことを求めた。彼らは大多数のインド人は国を発展に導く力を持ちながらも、怠惰ゆえにそれを発揮しないことを批判した。しかしサハーイの論調は読者に覚醒と行動を呼び掛ける以上の激しさである。その激しさに遅々として進まない社会改革への苛立ちと、加えて英国支配に対して率直な政治批判が不可能であった、という当時の現状を見ることができる。

5. 同胞意識の偏り

近代における文学者たちの目標は、まずは読者の啓蒙であり、そして民族意識の昂揚であった。彼らは国の向上を願い、記事において同胞に覚醒を呼び掛けた。しかし彼らの「同胞」意識には、制限があったことに留意すべきである。

(1) 「インド人=ヒンドゥー」

西洋教育の弊害とインド社会の発展を論じた記事（1894年）においてプレームガンは、キリスト教徒やムスリムを始めとする異教徒を自分たちの「宗教、宗教的義務、行動と思想の完全なる敵」として（Prasad (ed.) c1950: 212）。つまり彼は、自分たちの社会を向上させうる行為者として、ヒンドゥーのみを想定していたのである。

B.K. バットは、民族意識は自然と社会状況という二つの要因から人々の心に生じると主張する（Singh (ed.) c1996: 120-121）。彼は古代インドが繁栄していた頃はムスリムもまたアーリヤの一員とされていたことを紹介し、その繁栄は「現在英語がそうあるように」サンスクリットが国中で話されたこと、「ヴェーダに基づく宗教」のみが流用していたことに起因するとし、現在のインドは幾多の言語と宗教、宗派によって民族意識が分断されてしまっていることを指摘した。つまり彼の主張は、国の繁栄はサンスクリットとヴェーダによる宗教によってもたらされ、そこではムスリムはイスラム教ではなくヒンドゥーの教えに従って存在すべき、というものであった。バットが考える民族意識は、ヒンドゥー教徒としての団結によるものであり、そこにムスリムとしての存在は含まれなかった。

M.P. ドヴィヴェーディーは「インドにおける教育普及」と題した記事において、その前文として教育の普及を分析したインド政府による「大変素晴らしい書」を紹介するが、その書には、インドには階級に応じた教育が必要であり、そして「身体障害者、精神薄弱児、非アーリヤ」にはそれぞれ別に教育機会が与えられるべきである、と記されている。著者はここでアーリヤと非アーリヤを分類し、非アーリヤを健常者の範疇から外している。そのことについてドヴィヴェーディーは、ムスリムの就学状況が非常に遅れているからだと指摘し、それを「過去の栄

光に酔いしれて」ウルドゥー語やアラビア語という「網」に囚われているからだと同情を見せる。彼はムスリムを「過去の夢」「過去の栄光」にすがっている者と表現した (Dvivedi 1988b: 123)。そこにムスリムを同胞として見ている視線を、感じとることはできない。

ドヴィヴェーディーはまた、英字新聞からの引用で日本の教育制度を紹介し、日本の教育を良き日本人たる徳質を教えられるものだと称賛した。しかし記事の締めくくりとして記すのは「善行や良き規範を奨励する教育において、日本人はヒンドゥーに何ら劣らない」という言葉である (Dvivedi 1988b: 57-58)。日本人や日本を賞賛しながらも、彼の最終的な結論は「ヒンドゥー」の素晴らしさを主張することにあった。そしてそこに「インド人」ではなく「ヒンドゥー」という言葉が用いられたことに注目すべきであろう。ドヴィヴェーディーにとっては「インド人」という概念よりも「ヒンドゥー」「ムスリム」と分類される概念のほうがはるかに強いことが明白である。彼らヒンディー文学者が、反ムスリム感情をむき出しにすることはなかったにせよ、彼らの文章世界においては暗黙のうちに、ヒンドゥーとインド人が同義のタームとして使用されていたのである⁷。

(2) 客体としての農民

当時のジャーナリズムに表れる同胞意識に、ムスリムが含まれていなかったことは前述の通りであるが、文学者たちの視点から抜け落ちていたのは非アーリアだけではなかった。B.K. バット等の選集編者である Namvar Singh は、19世紀終わりから20世紀初頭の20年間を「ヒンディー・ルネサンス」とし、その時期に活躍した作家の特徴を、都市に住む決して裕福ではない英語教育を受けた階層だと説明した。さらに都市部に暮らしながら彼らは「農村と深く結びついている」という (Singh (ed.) 1996a: 7-9)。しかし作家と農村の結びつきへのこの評価を肯定することは難しい。

P.N. ミシュラは「農村への我らが務め」と題する記事において、国の改革の基礎は農村の人々の覚醒に他ならないことを主張する。彼は、都会をはるかにしのぐ人口を擁する農村に未だに改革の兆しが見えないことを憂う。そして改革者たちが都会にのみ目を向け、農村には足を踏み入れようとしめないことに対して

「一体国に奉仕しているのか、それともただ自分と同類の人たちから賛辞を集めようとしているのか」とその姿勢の是非を追求した (Malla (ed.) 1992: 283)。

ミシュラが社会改革者たちの都会に偏った働きかけを批判している点は評価すべきである。しかし彼が農村社会を理解し、農民の抱える問題を意識していたと評価することはできない。記事において彼は、農村に暮らす人々について、都会の人々と比較してより正直であり、非常に義理堅く忍耐強く、そして大変強い意志を持ち、また誰かの名誉や困難、悩みを解決するために困難に耐える力を持つ、と褒め称えた。さらにはそのような人々の暮らす農村を「神の思し召しによって未だにサティユガ（正法の時代）が存続している」とする。彼にとって農村は天国のような場所であり、人々は指導者を待ち望む無垢な存在でしかない。ミシュラは農村社会ならびに農民を概念でしか捉えることができていない。ゆえに農村が極めて曖昧な、幻想の社会としての印象を残すだけとなっている。

しかし農村に対するこの幻想は、ミシュラのみが抱いていたものではなかった。そのことを S.P. サハーイが明瞭に指摘している。サハーイは詩人や作家の文章の中では村落社会は「天国」であり、そこに住むものはみな「神様」として描写されていることを、大部分が空想の賜物だと非難した。そして現実の村落社会には悪も存在し、神様もまた悪魔になりうることを記す (Singh (ed.) 1994: 60)。ではそのサハーイは、農村社会を理解し、深く結びついていたといえるのだろうか。彼の代表作 *Dehati Duniya* (村落社会 1926) には、村で少年たちが遊ぶ風景や、村人の一日の生活の細細した様子など農村生活で目にする風景が描かれる。その序文において、サハーイは作品を「農村に暮らす純朴な友」のために書いたとする。彼はその「純朴な友」を同時に「文学の持つ豊かな世界を知らないかわいそうな人」であり、また「小説は読んでもその特長や善悪を知らない人」とも説明し、彼らを喜ばせるために「彼らにも理解できる平易で直接的な文体の作品」を成したとした (Singh (ed.) 1994: 1)。サハーイはこの作品を、農村部に暮らすものは純朴であり、また文学を味わうことができないという前提のもとに書いている。それはサハーイ本人が非難した「農村は天国、農民は神様」というファンタジーにつながる思い込みであろう。さらに「農村部の人々専用の文学」と彼はするが、彼らが用いる言葉を忠実に再現する以外にそのような文学は成立する

だろうか。また農村専用の文学なるものの存在が、農村部に暮らす人々に受け入れられるものだろうか。否、文学を楽しむことのできる能力を持つものは、農村部用の簡単な文学に反発しようし、能力を持たないものは、そもそもそのような文学の存在すら気にも留めないだろう。サハーイが農村部に関心を抱いていたことは否定できない。彼は他の文学者に先んじて村落に目をむけ、農村社会が幻想の世界として捉えられ、事実が歪曲して伝わっていることを非難した。しかしその彼をして、関心は表面的な事態の把握に止まった。彼らは農民の生活を質素かつ禁欲的だとみなし、それを農民の道徳的な偉大さと結び付けた。つまり文学者たちは農村社会を「外」から眺め、農民を客体としてのみ捉えていた。近代ヒンディー文学者たちは「無知と貧困に覆われた」農村部を向上させることを社会問題として提言し、かつ農民を自律可能な主体としてみなすところまでは、到達しえなかったのである。

6. おわりに

イギリスによる統治が始まった当初、知識層はムスリム支配からの解放を喜び、女王への信頼を表した。英国が統治機構の官吏を必要としたことと、インド人自身が新しい西洋教育を求めたことが近代教育の普及を促し、さらにイギリス当局の官吏への取りたてによって英語教育が奨励されると、インド青年の間に「骨の髄からの西欧崇拜」が広まった（木村 1981: 416）。同時に青年たちはインドの過去へ厳しい断罪の目をむけ、19世紀の初頭以来の西欧崇拜熱はインド人の内面にまで広がることになった。しかしイギリスの善政のもとでの社会改革が夢に過ぎないことが判明してくると、国内の惨状をムスリム支配と自国文明に帰すると自省し、イギリスを手本に改善しようとする知識層の姿勢は、次第にイギリスの圧政に対する不満と独立を求める声に変わっていった。それまで英国側に立って行われていた啓蒙活動は、ここにきてその立ち位置が揺らぎ始めたのである。

しかし植民地という立場での政治批判には当然限界があった⁸。ゆえに英国への憤りは直接表現することが憚られ、婉曲な批判という形式がとられた⁹。また同時に、文学者たちの言説はインド社会を糾弾する方向へと向かった。当初はご

く穏やかに西欧諸国との比較において自国の後進性を指摘し、国民の覚醒を呼び掛けるにとどまったジャーナリズムは、次第に過去の栄光を知らしめ、インド人に民族としての誇りを持つことを呼び掛けるようになっていった。しかし英国支配下では、民族としての誇りがインドの発展に結び付かないことを知覚し、その統治に絶望するにしたがって、インド社会に向かって反省を求める論調が次第に激しくなっていたのである。

その際、文学者たちが「我々」の社会として論じたのは、都市部に暮らすヒンドゥー、つまり文学者自らが帰属する社会を中心とするものであった¹⁰。ブレイムガンが1894年の記事において表明した以下の意見に、彼らの理想をもっとも明確に見ることができるだろう。

もし若者たちがインドをヨーロッパにするのではなく、ただかの地の優れた知識を収集して自国の繁栄に役立てようと決意するのであれば、もし若者たちがキリスト教徒やイスラム教徒になるのではなく、その最良の性質をもって魂の向上に努めるのであれば、もし若者たちが自分たちの社会に参加して明白な、輝かしい面持ちで運動を前進させるのであれば、もし若者たちがこの船の舵となって正しい道に進むよう努力するのであれば、必ずや今の状況はすぐさま喜ばしいものになる。(Prasad (ed.) c1950: 216)

彼らにとって、インド社会とはヒンドゥー社会であり、またインド人とはヒンドゥー教徒のことであった。彼らが目指したのは、西洋文化の模倣ではないインド独自の、つまりヒンドゥー独自の社会の発展であった。文学者たちの視線は、はじめから「インド独立」に向かっていたわけではなかった。19世紀末まで、彼ら知識層は英国を手本とし、英国側に立って啓蒙活動に励んだ。しかしその理想と信念は徐々に変化し、20世紀になると英国へ批判の目を向けるようになる。社会の発展と覚醒を願う彼らの内面は、時代と共に揺れ続けたといっても過言ではないだろう。そしてその揺れにこそ、我々は時代による制限と、その制限への反発から生まれる新しい思想潮流を見るのである。

注

- 1 歴史学者 D.N. マジュムダールはこの時代を「19世紀に入って英国の支配力が増大し、それに伴う知的水準の拡大が新しい思想潮流を生んだ。これによってインドの人々の政治的、社会的、宗教的、経済的な視点に変化がおき、1世紀のうちにインドは中世から近代へと変動した」と表現。(D.N. Majumdar, quoted in Sharma 1977. p.181)
- 2 たとえばハリシュチャンドラは1867年『カヴィ・ワチャン・スダー』、1873年『ハリシュチャンドラ・マガジン』、1874年『バーラーボーディニー』を編集出版。ただしこの雑誌も短期間で終了している。ヒンディー初の女性誌である『バーラーボーディニー』は3年間刊行されたのみ。バットは1877年から33年の長期間にわたって『ヒンディー・プラディープ』を編集、発行。また『サラスワティー』や『マルヤーダー』に定期的に寄稿。ドヴィヴェーデーは1903-20『サラスワティー』を編集出版、サハハイは1921年『マールワリー・スダール』、1923-24『マトウワラー』、1924年『マードウリー』の編集などに携わった。
- 3 その他プラタープ・ナーラーヤン・ミシュラに関して、その作品翻訳紹介ならびに文学活動紹介が古賀（1993）、高橋（1987）においてなされている。
- 4 1886～87年の公職委員会の報告によると「教育を受けた現地人」の数は、マドラスが1万8390人、ベンガルが1万6639人、ボンベイが7196人であるが、その一方で北部インドは連合州が3200人、パンジャブ1944人、中央州604人、アッサム274人にすぎなかった。州間において進歩の差、社会改革に対する意識の温度差は確実に存在していたといえる。(スミット・サルカール／長崎暢子他訳 1993: 95)
- 5 たとえば彼は、初等教育の義務化に真っ先に踏み切ったボンベイと、それに次いだベンガルの決断を称賛する。また女子教育の普及に関しても、未だ発展途中の連合州と比較してこの二つの地域を進歩的であると記した (Dvivedi 1988a: 135, 160) また、ヒンディー語圏のジャーナリズムの世界をドヴィヴェーデーは「盗作が横行している」と嘆いた。当地域でのジャーナリズムは、ベンガリーやマラーティー、英語の記事の翻訳に頼っており、時には記事が丸写しされていた。(Singh (ed.) 1996b: 218)
- 6 ローイが当時の総督あての請願書に記した言葉「英国政府の設立は神の思召しであります。ムガルの支配者たちの統治は放縦なものであり、9世紀ものあいだ我々は侮辱に耐えねばならなかったのです」(Sharma 1977: 183)
- 7 近代北インド社会において、ムスリムが「他者」とみなされていた言説を紹介した優れた研究として Charu Gupta *Sexuality, obscenity, community; Women, Muslims and the Hindu public in colonial India*, 2001. 特に6章のIV pp.239-259
- 8 たとえば1878年にリトン総督が土着出版法 (Vernacular Press Act) を発布すると、新聞発行には行政長官や徴税官が認定した役所の許可が必要となり、これはインド人の発行する新聞や雑誌に対する大きな弾圧となった。援助金の打ち切りや発禁、あるいは罰金や投獄への恐れが、英国支配への攻撃の矛先を鈍くしていたといえよう。Dalimia (2004)

によると、ハリシュチャンドラが編集・発行した月間の女性雑誌『パールボーディーニ』は発行部数（総部数不明）のうち100部を政府が購入していた。政府の支援終了とともに廃刊しているところから、政府の資金援助に依存していたこと推測される。（Dalmia 2004: 407）

- 9 たとえばドヴィヴェーディーは教育の重要性を説いた記事で、政策によって教育普及が阻まれていることを繰り返す。その際、教育費と比較して政府がどの部門にどのくらいの国家予算を割いているのか、特に鉄道費と警察への費用が教育費と比較してどのくらいなのか、諸外国がどれだけ教育に費用を投じているのか、など具体的な数字を羅列した。これによってドヴィヴェーディーは政府批判を最小限にとどめ、事実の判断を読者に委ねた。（Dvivedi 1988b: 124, 134-138 など）
- 10 小論では女性に関しては特に言及していないが、文学者にとって女性は常に救い、導いてやらねばならない「対象」であった。その際論じられる女性は、暗黙のうちに「高位カーストのヒンドゥー女性」であることが前提となっていた。（Komatsu 1999: 第一章）

参考文献

- 木村雅昭（1981）（S. 56年 2月28日）『インド史の社会構造』、創文社
- 古賀勝郎（1993）「19世紀のインドの記録 1. バーラテンドゥ・ハリシュチャンドラ、プラタープ・ナーラーヤン・ミシュラ」、『印度民族研究』第8号、大阪外国語大学インド・パキスタン語研究室
- スミット・サルカール／長崎暢子他訳（1993）『新しいインド近代史1』、研文出版
- 高橋明（1987）「19世紀後半のヒンディー語文学者の言語・宗教・社会観——プラタープ・ナーラーヤン・ミシュラについて」『印度民俗研究』別巻IV、大阪外国語大学インド・パキスタン語研究室
- 高橋明（1990）「バーラテンドゥ・ハリシュチャンドラの文学観」、『大阪外国語大学論集』第3号

Dalmia, Vasudha. 1997 *The Nationalization of Hindu Traditions; Bharatendu Harishchandra and Nineteenth-Century Benares*, Oxford University Press, Delhi.

——. 2004 'Generic Questions; Bharatendu Harishchandra and Women's Issues', in Stuart Blackburn and Vasudha Dalmia (eds), *India's Literary History; Essays on the Nineteenth Century*, Permanent Black, New Delhi.

Das, Brajratna (ed.). c1950 *Bharatendu Granthavali*, 1st vol. Nagari Pracharini Sabha, Kashi.

Dvivedi, Mahavir Prasad. 1988a *Racnavali Khand: Sat Bharati Bhandar*, Kashi.

——. 1988b *Sankalan*, Bharati Bhandar, Kashi.

- Gupta, Charu. 2001 *Sexuality, obscenity, community; Women, Muslims and the Hindu public in colonial India*, Permanent Black, New Delhi.
- Komatsu Hisae (1999) *Hindu Nariyon Ke Suvavlamban Ki Stihiti; san 1870 se 1940 tak Uttar Bharat Ki Hindu Nariyon Ko Kendriya Banakar* (大阪外国語大学修士論文、1999年提出)
- Malla, Vijay Shankar (ed.). 1992 *Pratapnarayan Granthavali*, Nagari Pracharini Sabha, Baranasi.
- Orsini, Francesca. 2002 *The Hindi Public Sphere 1920-1940: Language and Literature in the Age of Nationalism*, Oxford University Press, New Delhi.
- Prasad, Prabhakareswar (ed). c1950 *Premghana Sarvasva*, 2 bhag, Hindi Sahitya Sammelan, Prayag.
- Sharma, Jhabarsidasa (ed.). c1950 *Gupta-nibandhavalī*, Gupta-Sumarak Granth Itakashan-Samiti, Calcutta.
- Sharma, Sitaram. 1977 *Unnisvin sati men bharatiya dharmik tatha samajik jagaran Madhya Pradesh Hindi Granth Akademi*, Bhopal.
- Singh, Namvar (ed). 1994 *Shivapuan Sahay; Prathidhi Sankalan*, National Book Trust India, New Delhi.
- . 1996a *Bal Krishna Bhatt; Prathidhi Sankalan*, National Book Trust India, New Delhi.
- . 1996b *Mahavir Prasad Dvivedi; Pratinidhi Sankalan*, National Book Trust India, New Delhi.

On the Way to Modernity : from the Discourse of the Modern Hindi Literati in Northern India

KOMATSU Hisae*

It is said that in India, many changes (i.e. social, political, economical and religious change) started from the modern period, after the mutiny. In Hindi literary world also, a new trend, the style of prose, came out in this period. The style of prose was advocated by Bharatendu Harishchandra, and refined by Mahavir Prasad Dwivedi and his literary contemporaries.

During the modern period, for the Hindi literary eminences main stage was journalism. They engaged a number of magazines and newspapers as a writer and editor. Through the journalism, they tried to appeal to social awakening and development.

At the beginning of the modern age, they welcomed the British Raj, because, they said, the British saved them from the Mughal regime. But slowly they started to have criticism toward the colonial government and look for the way to the independence.

But under the colonial system it was difficult to show the public critique of the Government. Hence the literati began to criticize their own society. However, those critiques were not permanently, sometime they blamed some social ill and sometime praised the old glory.

When the Hindi literati talked about social progress, they took only the 'Hindu society' into account. In their context, India is the nation of the Hindu, and, Indian is the Hindu. In their theory we can not find their concern about Muslims nor the people who live in the rural area as their fellow citizen. In modern period their awareness of the issues was limited in their own belongingness.

* Part-time Lecturer, Osaka University of Foreign Studies